大正天皇御一代画報

特
278
77

秋田魁新報社發行

始

大正聖天子

御名嘉仁、明治天皇第三皇子、明治十二年八月卅一日青山御所にて御生誕、人皇第百廿三代の天皇にあらせらる。御幼名は明宮、明治廿年八月三十日東宮宮下、同年九月十九日御年九歳で學習院へ御入學、同二十二年十一月三日立太子式を擧げさせ給ひ陸海軍少尉に御任官大勳位に叙せられ、三十年八月三十一日御成年式を擧行、卅三年二月十一日公爵九條道孝公第四の御女節子嵯を立てゝ皇太子妃と定め給ひ、同三十三年五月十日御成婚、同四十五年七月三十日御踐祚、大正四年十一月十日御即位の大典を擧げさせ給ひ、十四年五月十日銀婚の御盛典を擧げさせらる。御靜養のため十年十一月廿五日皇太子裕仁親王攝政の大任に就かせらる。十五年十一月頃より御惱すすませられ十二月廿五日崩御あらせらる。

皇子　明治三十四年四月廿九日第一の皇子迪宮裕仁親王殿下、同三十五年六月廿五日第二の皇子淳宮雍仁親王殿下、同三十八年一月三日第三の皇子光宮宣仁親王殿下、大正四年十二月二日第四の皇子澄宮崇仁親王殿下御生誕あそばさる。

今上天皇

御名裕仁、大正天皇第一皇子にましまし明治三十四年四月二十九日御誕生、同年五月五日迪宮と稱せられ、大正元年九月九日陸海軍少尉に御任官、同五年十一月三日立太子禮御擧行、同八年五月七日御成年式擧行、同九年三月三日歐洲各國御巡遊の途につかせられ同年九月三日御歸朝、同十年十一月二十五日先帝御靜養の爲め攝政の大任につかせ給ふ。同十三年一月二十六日久邇宮邦彦王第一王女良子女王と御結婚、同十五年十二月二十五日先帝崩御あらせられ即日御踐祚遊ばさる。

大正天皇

大正八年十一月鎮西の野に挙行されし陸軍特別大演習御統監のため行幸あそばされし陸兵庫鎮西國鐵道御巡遊の御馬車上を謹寫せるもので、先帝陛下御在世中の最も新しきお寫眞である。

皇太后陛下

御名節子、故從一位大勳位九條道孝公第四女、明治十七年六月二十五日御誕生、御幼少の折は九條家の家例として東京府下杉並の農大河原家に於て御養育申上げ明治二十一年十一月十日まで同家に於て御生育遊ばさる。同二十二年華族女學校に御入學、明治三十三年五月十日御入輿、皇太子妃宮下大正元年七月卅日皇后宮下あらせらる。

皇后陛下

御名良子、久邇宮邦彦王殿下第一王女、明治三十六年三月六日御誕生、明治四十二年四月學習院女學部初等科に御入學、大正七年一月十七日東宮妃御立、同十一年六月二十日御結婚勅許、同十三年一月二十六日御入輿、皇太子妃宮下あらせらる。

御成婚當日衣冠束帶の大正天皇

御成婚當日御式服の皇太后陛下

大正天皇 御一代年譜

皇太子時代

明治十二年青山御所に於て御降誕（八月三十一日）明宮と納せらる（九月六日）中山忠能侯御歌会始となる（十二月）

同十三年御所に於て御誕生（二月二十八日）

同十六年青山御所に御移居（三月二十三日）

同十七年東宮宮殿、高仁親王と御婚（六月十一日）學習院に御降園（九月）

同二十二年赤坂離宮本御殿（御居所）に立太子の事行幸（二月）

同二十七年學習院御臨幸、赤坂離宮内に御學問所設置さる

同三十三年九條節子姫と御成婚の大礼を挙げさせらる（五月十日）

同四十年韓国御巡遊（十月）

同四十四年北海道行啓

大正元年 （御年三十四）

◇治天皇崩御により踐祚、大正と改元（七月三十日）◇明治天皇御大喪の儀青山に行はせられ（九月十三日）伏見山に御陵墓（九月十五日）乃木希典夫妻自刃す（九月十八日）◇西寺内閣辭表を呈（十月十七日）◇桂内閣成立（十二月十七日）

大正二年 （御年三十五）

◇太極兵衛内閣成立（二月二十一日）◇山本權兵衛内閣成立（二月二十五日）◇日露協約フォルッ議會を通過（四月二十九日）◇元帥海軍大將有栖川宮威仁親王薨（七月十七日）◇特別大演習のため七月七日行幸（十二月十二日）◇上海鐵道を大勲位貴族院に被授付

大正三年 （御年三十六）

◇皇兄高雄殿薨（八月十二日）

大正四年 （御年三十七）

◇第一次世界大戦勃発（七月二十八日）◇日本、ドイツに宣戦布告（八月二十三日）◇青島攻略（十月）◇第二次大隈内閣成立（十月十六日）◇第二次大隈内閣辭表（十月十七日）

大正五年 （御年三十八）

◇山本權兵衛内閣成立（十月十日）

大正六年 （御年三十九）

◇寺内内閣成立（十月九日）◇東宮殿下御成婚（十月十二日）◇特別大演習のため（十月十三日）◇行幸（十一月七日）

大正七年 （御年四十）

◇大隈内閣辭表（六月十四日）◇寺内内閣成立（十月九日）◇東宮殿下立太子の礼を行はせらる（十一月十三日）◇特別大演習のため岡山縣下へ行幸（十一月七日）

大正八年 （御年四十一）

◇欧洲大戦終結、講和の為パリに御出發（十一月十一日）◇原敬内閣生る（九月二十九日）◇原敬内閣大臣任命式（十月）◇第一回万国議会開会（十月）◇第一回万国議会開会（十月）◇第一回万国議会開会

大正天皇御少年時代

先帝の御發明

近頃の小學生にはよく背嚢を負つて甲乗々々しく學校に通つてゐる姿を見受ける。あの背嚢は先帝の御發明にかゝるものである。陛下まだ學習院に御入學になる前のことであるといふ。ある日陸軍の練兵を御覧に入れたことがあつた。ところが先帝は兵士の背負つてゐる背嚢かこと〳〵くお氣に召させられたと見えて、

『あれが欲しい、あれが欲しい』

と背嚢を指さしておねだりになつた。ところが兵隊の持つ背嚢は大きい。そこで特別に小さい背嚢を作つて中には何にも入れない軽いものにして獻上したところ、こと〳〵くよろこびになつて、朝お起きになつた時から夜おやすみになる八時頃までといふもの、件の背嚢を背負ひつめておいでになつたといふことである。さてその後學習院に御通學あそばす時となつて、この背嚢の中に書籍その他の文房具を入れさせられ、それを背負つていそ〳〵とお出かけになつたもので、それを拜見した學習院の生徒達が申し合せたやうに皆背嚢を背負ひ、それがだん〳〵廣がつて今日では殆んど日本全國この背嚢を背負ふといふことになつたものである。生徒背嚢の御本家はおそれ多いことながら先帝にわたらせられる。

御年八歳
明治十九年

御年九歳
明治二十年
この年の八月三十一日東宮宮下、嘉仁親王と稱へられ、九月學習院に御降學。

御年十一歳
明治二十二年
この年十一月三日立太子式御擧行陸海軍少尉に御任官

御幼時の御規律

「軍人に姿勢はない…」

先帝七八歳の御頃といふ。御附武官であつた某陸軍大佐、ある冬の日の朝まだき、勤政室に詰めてゐた。その日は雪がつもつて刺す様に寒い。大佐は我知らず火鉢を足もとに引寄せて水を讀んでゐた。その時「大佐」と、うしろから幼げれども威厳ある聲がした。驚いて仰ぎ見れば先帝であらせられる。「大佐寒いネ」と仰つしやつて御微笑を含ませ給うた。大佐は容をたゞして、

「軍人には姿勢の別は御座いません、寒いなどゝ女々しいことは口にすべきものでは御座いません」

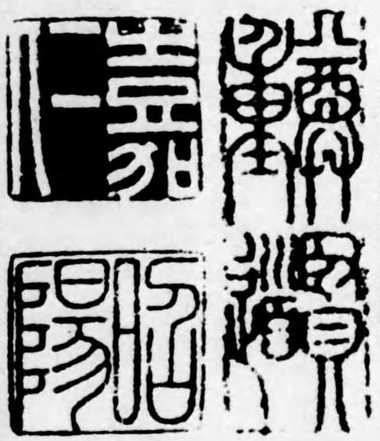
とお答へすると、たゞ

「さうか」と仰せあつたのみで奥に入らせられた。さてそれからであるも、大佐は自分が厚丈々してゐたことを思ひ出した。そして姿勢のあまり平側しようとしたほど自分の言行一致せぬことを恥ぢてゐた。それから幾日か過ぎた日のこと學習院の教室に御臨學になつてゐらせられると、御附武官の某中尉は寒さが烈しいので、そつと御足下に火鉢を差入れ申し上げてゐたがそれをお氣付になつて直に中尉を召して、

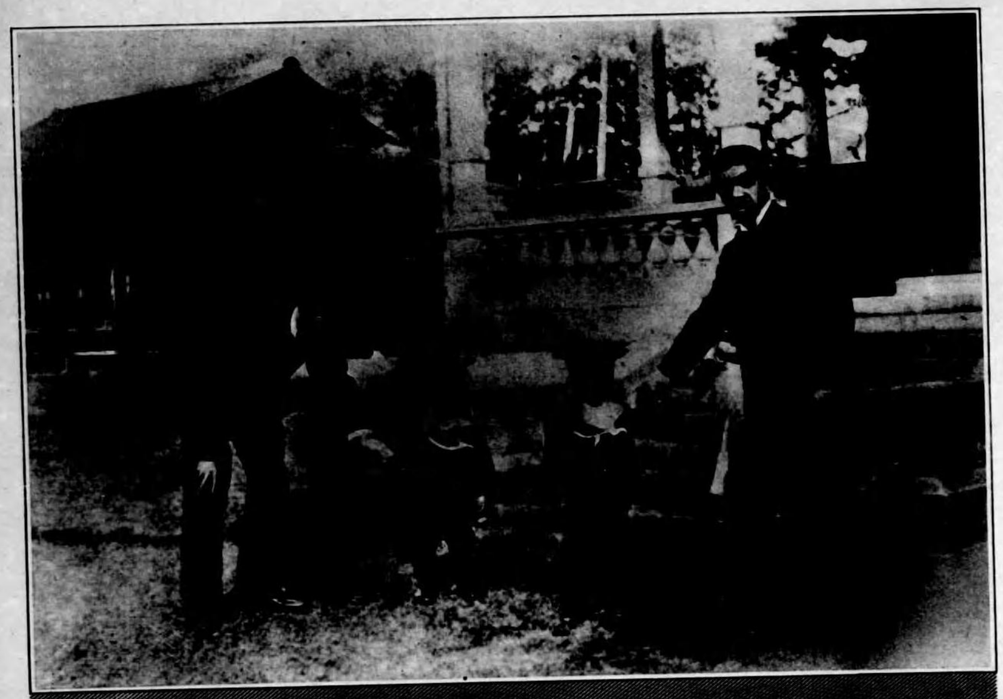
「軍人に姿勢の別なきものぞ、この火鉢を取除けよ」と厳として中尉に仰付けられた。後日中尉がこのことを例の大佐に語ると、それを聞いた大佐、はら〳〵落涙してありしことの次第を物語り、この上は御前に伺候し側の過言を謝し率りす時も早く御暇を願はつて謹慎しようとその手續きをしたのであつたが、明治大帝から「御なし」との御沙汰があつて辛つてその科直忠實を御嘉賞になつたと傳へられる。

御歳廿一歳
明治廿二年
この年八月三十日近衛師團司令部附及び常備艦隊附とならせらる

御歳十七歳
明治二十八年
この年一月四日陸軍大尉に御昇進、當時の御姿



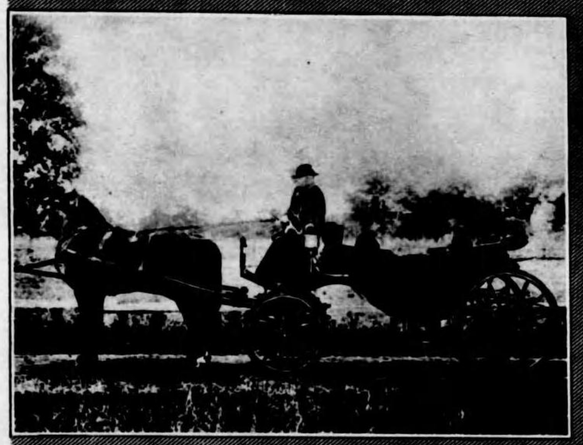
大正天皇の御落款と調防御印



御成婚
當時の御佛
明治三十三年御成婚の當時陸軍通常服を召されし先帝陛下

御渡鮮當時の
大正天皇
大正天皇には未だ東宮に在せし明治四十年十月朝鮮に行啓あそばされた。このお寫眞は當時朝鮮王城に於て記念御撮影になりしもので前列中央が陛下、右に李王(當時李王世子)、有栖川宮殿下、伊藤博文公である

北海道行啓
明治四十四年八月新冠御料牧場に於て拜寫す

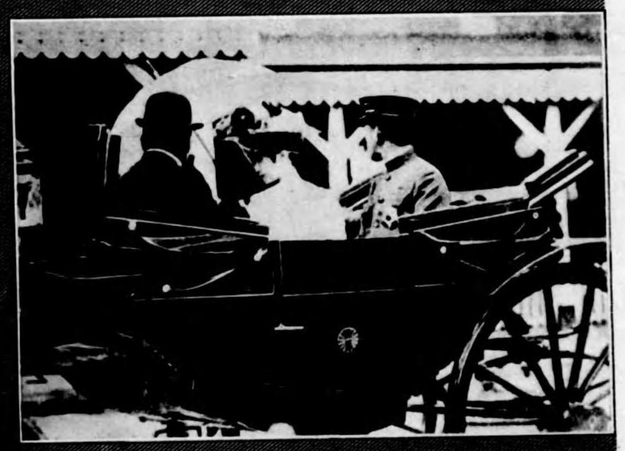


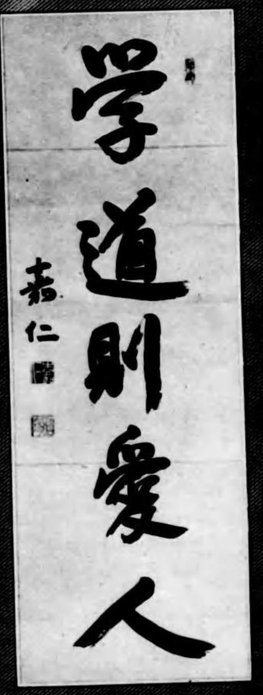
東宮
御時代

皇子のお手を
ひかれて
先帝には皇子の御惹み殊に深く、青山御所に於ける東宮の御頃、御參間の後取には常にお手をひかれて御庭内を御散歩遊ばされたと傳へらる。お寫眞右より先帝、今上天皇、秩父宮殿下

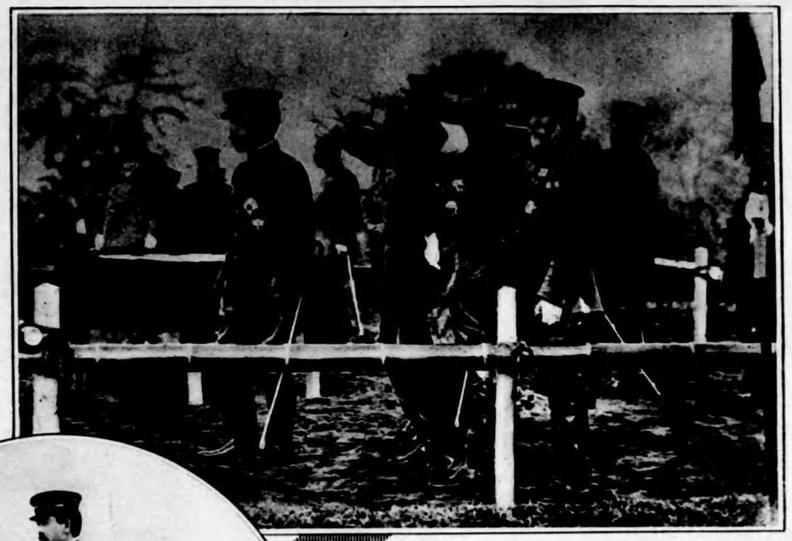
御同列の
御馬車上にて
お寫眞は東宮の御時代、日光の御避暑から紀殿下御同列にて還啓遊ばされし際上野驛頭にて拜寫す

御眞筆
本居家に御下賜になりし先帝の御眞筆





大演習御統監の先帝



大正四年十月奥羽地方に於ける陸軍特別大演習御統監の爲め行幸、折柄の寒氣にも外套を召させられず青森縣石江の御野立所に長谷川參謀總長の御説明を聞し召さる

大正元年十一月埼玉地方に於ける陸軍大演習に行幸所澤附近にて御統監の御英姿

大正三年十一月關西地方に於ける陸軍大演習に行幸、大阪府星田の御野立所に向はせらるる御途中、御陪乘は伏見宮貞愛親王殿下

陸軍中將御正装
明治四十二年十一月三日陸軍中將に御昇進當日の記念御肖像

古稀庵にお立寄の先帝
明治四十三年（東宮御時代）小田原地方へ行啓の際同地の山縣公別邸お立寄りの御茶室に御休息のところを祥寿せしもの、先帝の御右山縣公、フロックの上にみの笠姿で御興を乗へまいらしたのは湯浅吉子爵である

秩父宮

御名雍仁親王、大正天皇第二皇子、明治三十五年六月二十五日御誕生、初め淳宮と稱へられ大正十一年六月二十五日御成年式を行はせらるるにあたり秩父宮の御稱號を賜はる。大正十一年九月陸軍士官學校御卒業、同年十一月陸軍少尉に御任官、同十四年五月十日陸軍中尉に御昇任

高松宮

御名宣仁、大正天皇第三皇子、明治三十八年一月三日御誕生、初め光宮と稱へられ大正二年七月六日高松宮の稱號を賜はる。同十四年十二月陸軍少尉に御任官

澄宮

御名崇仁、大正天皇第四皇子、大正四年十二月二日御誕生、大正十一年四月八日學習院初等科に御入學、引續き御在學中

大正天皇御歌

田家梅

かきりなき山田の里のにきはひも
たてるけふりにしられけるかな

松上鶴

山松の梢にすたく雛鶴も
おやにならひて千代よはふなり

雪中竹

ふりつもるまかきの竹の白雪に
世の末けさをおもひこそやれ

新年梅

あたたまの年の初めの梅の花
見るわれさへにほふ春かな

新年海

鈴鹿にしるしの旗手のうちなびき
うらにきはしく年たちにけり

巌上松

ふきさわく風の山のいはね松
うこかぬ千代のいろそしつけき

新年山

新玉の年の初めに仰きけり
君かみいつのいや高き山

新年河

たひらかに年流かへる五十鈴川
おみのめくみのふかきをそくむ

新年松

たみはみな年の初めを松のえた
かとにかさりて御代いはふらむ

社頭松

をとこやまみさををかへぬ若松の
すゑたのもしき君か御代かな

御馬の上の大正天皇

雪中松

いとゝしく降り積む雪をちよふへき
まつはものともおもはさるらむ

新年雪

とし立ちて降る雪見でも大君の
ふかきめくみをひとあふくらむ

寒月照梅花

かけさゆる月にきはひて咲く梅の
花のこころそをゝしかりける

松上鶴

こゑつ原すゑはるかにも聞ゆなり
とものよひかはよひた鶴のこゑ

社頭杉

さくすすのいすすのみやにしけりあひて
たてるかみすきいく代へぬらむ

寄國祝

としゝとしにわかの水のさかゆくも
いそし行式のあれはたりけり

遠山雪

雪白き富士のたかねの見ゆるかな
かしこゝろの松のこすゑに

海邊松

汐風のからきにたへて枝ふりの
みなたくましき磯の松原

朝晴雪

ゆたかにも雪そつもれる秋津しま
めくりの海は領なきにして

田家早梅

冬なからかきねの梅もさいてて
たなかのいほの梅の花咲く

社頭曉

神さつるわか日神のそてのうへに
かつうすれゆくみあかしのかけ

先帝御製御眞筆

皇室皇子の御誕生

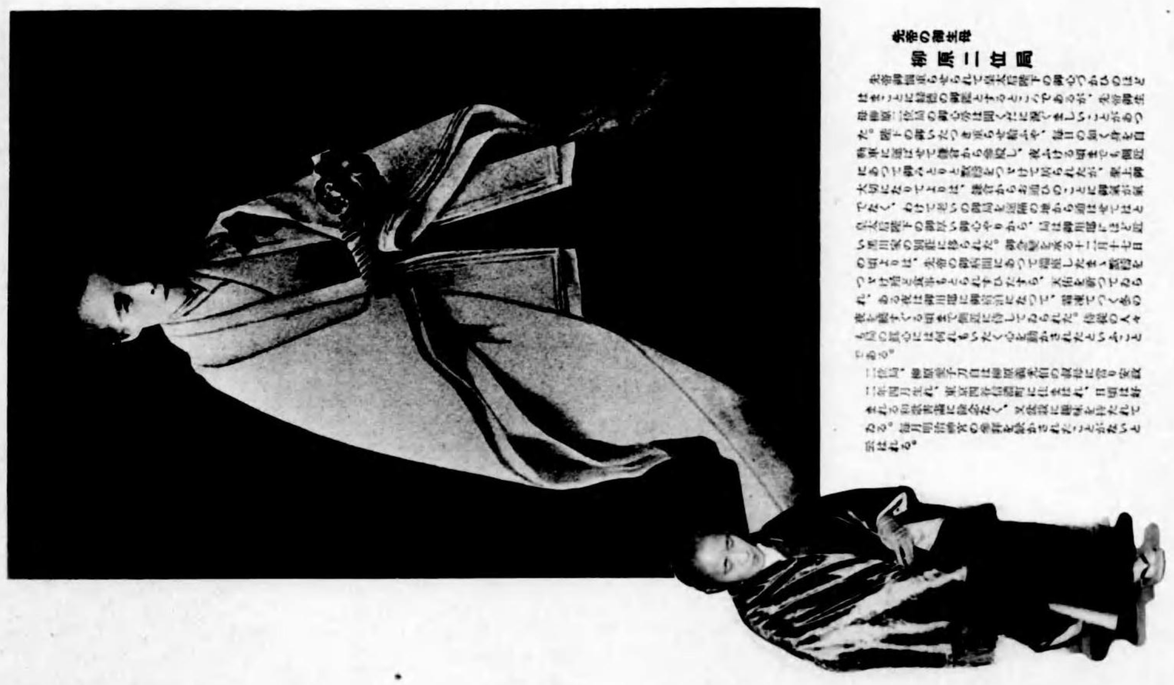
今上天皇陛下は大正十四年十二月六日裕仁親王殿下として誕生遊ばされ、以来今日に至るまで、皆様方の御愛顧を蒙り、ありがたく、有難く、日夜皇室の御繁栄を祈り奉る。

竹田大妃宮
皇子の御誕生
大正四十二年七月十三日明治天皇大妃宮
大正四十二年七月十三日竹田宮誕生

北白川大妃宮
皇子の御誕生
明治天皇第七皇女、明治三十三年十二月二十八日北白川宮誕生
大正四十二年四月北白川宮誕生

東久邇宮妃
皇子の御誕生
明治天皇第九皇女、明治三十六年五月十一日東久邇宮誕生
大正四十五年五月東久邇宮誕生

朝香宮妃
皇子の御誕生
明治天皇第八皇女、明治三十四年六月十日朝香宮誕生
大正四十三年六月朝香宮誕生

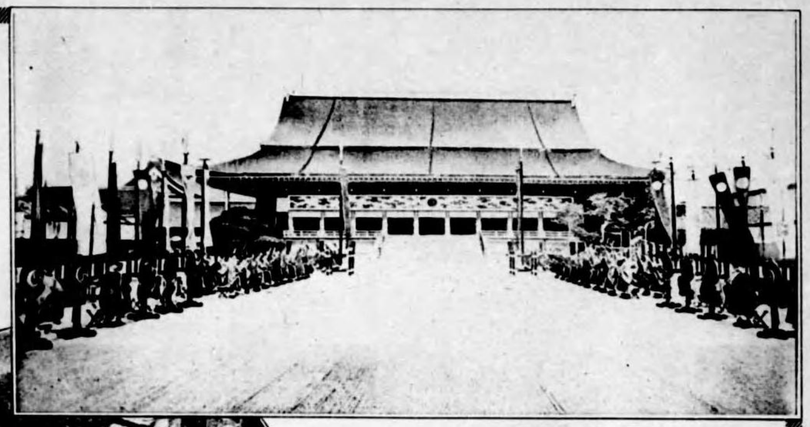


東宮御妃殿下

御結婚の日

東宮殿下の御結婚の日は、皆様方の御祝福の中に、御成婚の日を迎へ、

大正天皇御式典
大正天皇御年譜



大正天皇御即位式遙拜

大正四年十一月十日京都に於て行はせられ、宮城に式場紫宸殿である

大正四年十一月六日宮城御出門京都に向ひ御出發の宮城は馬場先御門を御通過の際撮影せるものである

高御座

英國特別使大派遣
ジョージ・ロイド

パリに歐洲大戰講話會議開かるる（大正八年一月十八日）

日本特派使大
西園寺公望

米國特派使大
ウィルソン

佛國特派使大
レイモンド・ポアンカレ

佛國特派使大
ドンラルオ

獨國特派使大
ルゲルベルツ

大正十年十一月十二日ワシントン會議開かる

帝國全權委員海軍大臣加藤友三郎、駐米大使幣原喜重郎、貴族院議長徳川家達

大正九年十月一日第一回國勢調査施行せらる

東宮イギリス御巡遊（大正十年五月七日）

大正十二年九月一日關東大震災起る（東京震災地御巡視）

大正十四年一月廿一日北京に於て日蘇兩國條約調印終る

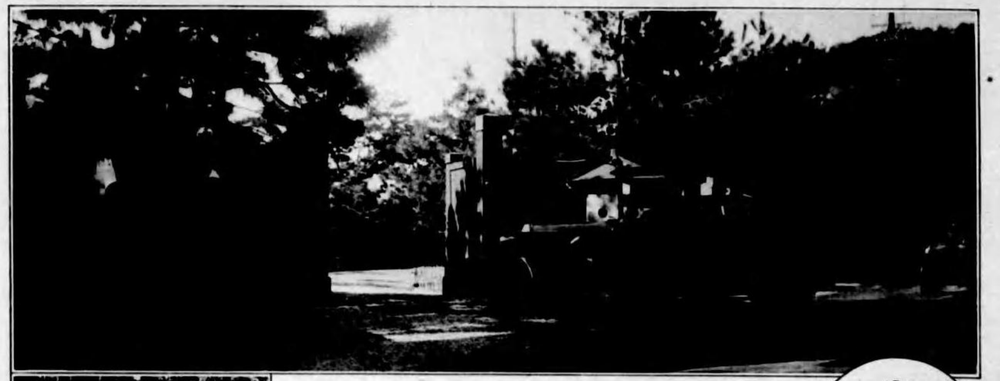
大正十四年五月十日銀婚式祝典挙行
（宮城前奉祝門附近の賑ひ）

先帝と曾我將軍

先帝御幼時の養育係長
曾我陸軍準將

陸軍中將曾我祐準氏は先帝御幼時の御養育係長として誠心誠意御奉仕申上た。有名な硬骨漢で今年は最早八十五才、當時御養育に當つて御附の人々はら〳〵する程厳しく取扱したが、御幼なき先帝には非常なる御愛しみを感じ結ひ、何かにつけ「曾我々々」と呼ばせられ、御氣に入りであつただけに先帝の御容態を御聞念申上ること人一倍に強く、御不例以來殆ど間となく御見舞に參殿したが、十二月十八日頃の御病状に驚いて、また〳〵駆けつけたのを皇太后陛下が聞こし召され、當時先帝には非常の御重態で皇孫方ですら御拝謁に御遠りにならぬ程であつたのに關らず、皇太后の宮には「特に御病室に通してよろしい」との御沙汰があつた。この思ひがけぬ有難き御言葉に將軍は夢か夢かと許り感激に咽ひ、恐る〳〵御病室に進み、先帝に最敬禮をなし謹んで御面を退下したが、皇太后宮の厚い思召には實に〳〵感謝に堪へぬ次第であつたと申す。

御不例 先帝書報



葉山に御滞在の上、連日お父陛下の御病床をお見舞ひあり、かつ御看護にお疲れの御母陛下をお慰め申上げる御孝心深き澄宮殿下

葉山御用邸に参向の各宮さま

御見舞のため葉山御用邸西附属邸正門より御参入の今上、皇后兩陛下

御見舞のため葉山御用邸に参向の竹田宮大紀(御左)北白川宮大紀兩殿下

久邇大將宮同妃、兩殿下の御見舞

東京驛御出發の李王垠同妃兩殿下

梨本宮妃、同王女子兩殿下の東京驛御發

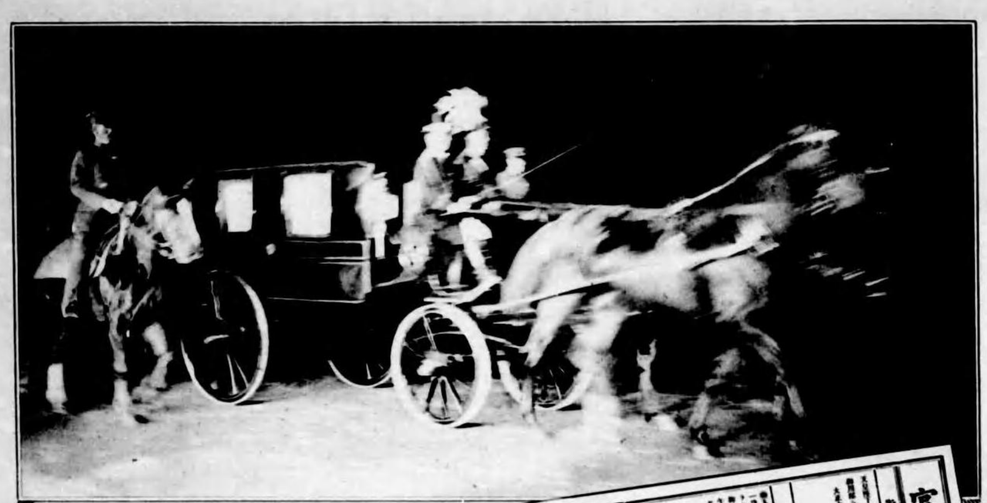
無宮成子内親王殿下の御見舞(冠子驛御着)

先帝の御病歴

御發病

先帝の容易ならざる御惱にわたらせられることが強御として宮内省から發表されたのは實に大正九年三月二十日であつた。

陛下御疲れの種の公式等相ゆ、つゆで大病の御加に、既に大御後は多種の公式等相ゆ、つゆで大病の御加に、既に大御後は多種の公式等相ゆ、つゆで大病の御加に、既に大御後は多



御靈柩車原宿驛より宮城へ還御（日比谷附近附近過御）

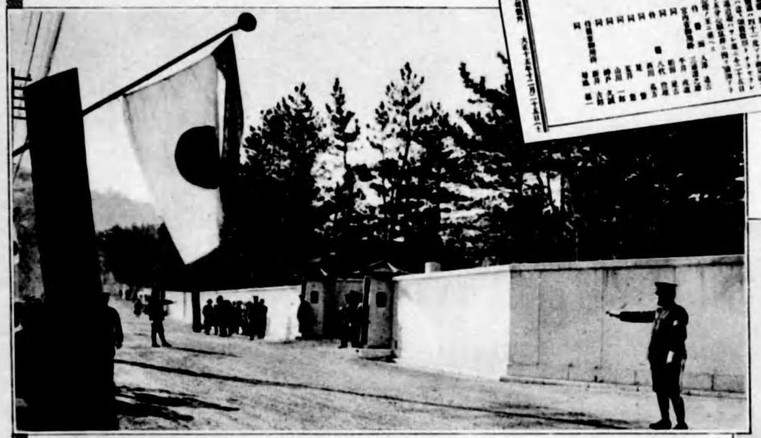
官報

號外

宮廷錄事

崩御を告示する官報號外

御靈柩東京に還御



御靈柩を奉送する陸海軍將星（上）と葉山驛頭（下）

崩御當日の葉山御用邸前（弔旗哀し）

英國大使館の敬弔

大正天皇の御靈柩は十二月二十七日午後四時五十五分葉山御用邸を御發引、同五時三十分逗子驛御着、直ちに靈柩列車に御移乘申上げ、皇太后陛下にも御同列にて沿道官民の奉送迎をうけさせられ午後七時五分原宿驛皇室專用ホームに御着、お馬車に移し參らせ、御行列を整へて市民奉迎の中を八時近く宮城に還御あらせられた。

二重橋前に新願の東京市女學生團

先帝御不例の報一たび傳はるや國民ひとしく御平癒を祈り、宮內省にお見舞ひの電報を寄するあり又奉物を献上するなど至誠の程實に涙ぐましきものがあつた。殊にさる外人の如き、わざ〳〵貴重の藥品を遠く本國より取寄せて宮內省に差出すなど當局者をしていたく感激せしめた。尙は御病勢まさ〳〵つのらせたまふと傳へらるるや、全國民を挙げて神社に佛閣にひたすら御病の安きを祈請所願するのであつたが、今はそれも哀しき思ひ出である。

小學女生の葉山神社に參拜新願

葉山御用邸前に深夜の熱給

明治神宮に近衛兵の新願

國民の御平癒新願

葉山御用邸前に青年團の伺候

日本聯合少年團は十一月十六日久邇侯、二荒伯、三島子に引率されて葉山御用邸に伺候お見舞を申上げた

西久保東京市長の御平癒新願（明治神宮にて）

御大喪儀

大正天皇崩去りたまひて四十五日、大喪儀は二月七日より八日の間かけて行はれた。七日午後九時まつ宮中御殿にしつらへられた御殿に於て歴代奉安の儀が厳かに執行され、天皇、皇后(御名代)、皇太后三陛下の御拝礼があり九時五十分御儀が終るや、引続き午前十時より宮城正殿に於て最後の殯宮祭が行はれ、天皇、皇后(御名代)、皇太后をはじめ挙り各皇族、同妃殿下の御拝礼があり、殯宮の御儀はこれをもつて全く終了した。

この日風なく日うららかに霽れて上弦の月が大内山の梢に輝く頃、午後五時半宮城正殿なる殯宮は固かれ御遺骸をば御近く奉仕せる高等官の手によりて本道を御車寄に運びまいらせ、御霊車に移御、正六時参謀本部前にて打ち鳴らす弾丸一発を合図に遺骸は四牛により七柿の宮殿を帆らせおそれ捧り惜しくも皇居をおあとに遷御遊ばさる。この時天皇、皇后(御名代)、皇太后陛下には正門内の幕舎にて奉送遊ばさる。かくて鹵簿は二重橋外へ、櫻田門前を、司法省前軍警列を見の門へ、溜池へ、赤坂見附を左へ、青山御所前を、陸軍大学前を信濃町へ、鹿鳴大学病院前へ、新宮御殿なる墓場殿へ、道道の民衆この大行を拝して感しとど、涙をあひ得るものもない。行列の長さ実に一里半、八時三十分墓場殿に奉安せられた。九時参列諸員左右の幕舎に着席、次で天皇、皇后(御名代)、皇太后宮並に各皇族御着席、一般官長の謹拝あれば、天皇陛下に社御玉櫛の前に玉歩を運ばせ給ひて玉串を捧げられて のち、玉音打しめりつゝ御誄を奏せらる。参列諸員御辞を謹み感泣つて捧くもあつた。皇后宮御名代の御拝ありてのち皇太后宮には御代もお御しまお取りにて御玉櫛に進ませられ御鍬遊ばか〳〵に永く御心のうちを拝して謹れ誄としほる。外国拝礼の後、若槻内閣総理大臣、一木宮内大臣の誄奏上ありて後、正十一時となれば陸軍大学御門にて放つ弔砲とどろく。この御出棺あるや汽車も自動車も一斉に停止し東京市民はもとより全国民御墓場殿の方に向つて拝礼す。

墓場殿の御儀おはれば御遺骸を御墓に埋し御十八柵玉かつぎまつり、諸員最後の御儀なる御拝礼あり、御霊柩列車に奉安す。この時第八日午前零時二十分である。天皇、皇后(御名代)、皇太后宮には後の御休憩あり、二分の後大正天皇陛下には本八代に御幕の御を御れさせ給よ大のである。

大喪儀
畏
報
大喪使総裁
開院宮載仁親王(上)

御葬列中の天皇陛下御名代秩父宮雍仁親王　聖靈供奉の各大臣(下)

恩赦と敕諭

二月七日御大喪ニ当リ大正天皇ノ御霊ニ最後ノ御別ヲ告ゲラレタル今日ニ臨ミ恩赦ヲ行ハシム

恩赦詔書

敕大喪ニ当リ恩赦ヲ行ハシム有司ヲシテ其ノ事ヲ掌ラシメ朕ヲシテ親ラ恩赦ヲ行ヒ以テ敕ヲ四海ノ衆ニ布ケトス

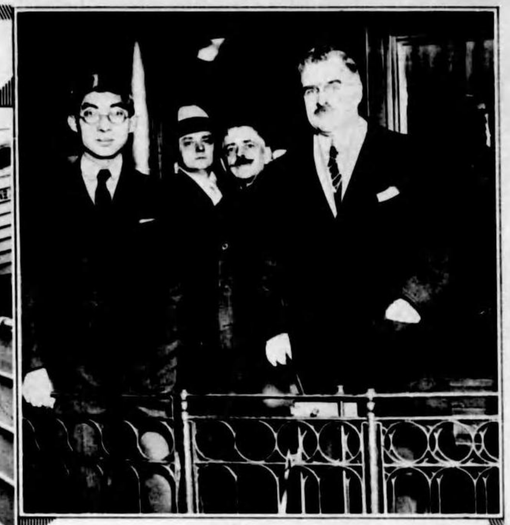
御名御璽
昭和二年二月七日

内閣総理大臣
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

勅語

敕大喪ニ当リ朕ハ有司ニ命シテ恩赦ヲ行ハシメ以テ大喪ノ日ニ当リ朕ノ意ヲ四海ニ布ケリ

秩父・東久邇両宮の御歸朝



ニューヨークよりワシントンに向はせられつゝある車上の秩父宮殿下(右)お出迎の國務次官パラー・ライト氏)

秩父宮御歸朝

お父陛下の御病篤くお大切との御通報をうけさせられた秩父宮には急ぎ御帰朝の皆仰出されて十二月二十二日サザンプトンより世界最大の巨船マヂエスチック號に乗船、アメリカ經由御帰國の途につかせられた。太西洋上に於て先帝崩御の途報を接せられ、同月二十八日ニューヨークに御着御上陸に際しては出迎の新聞記者団にステートメントを發せられた。二十九日ワシントン御着一泊の上、非公式にクーリヂ大統領を御訪問、お心せくお旅程なく登程せられる。同日夕刻國務省の特別に仕立てまいらせ急行車にて御西行、一月三日サンフランシスコ御着、四日我が郵船サイベリヤ丸に御乗船、同月十七日横濱に御安着、東宮御より直に宮城に御参進、殯宮に御御拝あそばされた。

東久邇宮横濱御上陸の御到

秩父宮に寄せられたる米國の厚意

十二月二十八日ニューヨーク御着、御上陸に際し御宮の内閣がガヴナー島にさしかゝる中、同島の要塞が日東の國旗のために二十一発の禮砲を發射して敬意を表した。又、米大陸横断に際して國務省は急行郵便列車に特別車室を連結して殿下お急ぎの御帰朝に出来得る限りの御便宜を計らつたのである。

殿下のステートメント

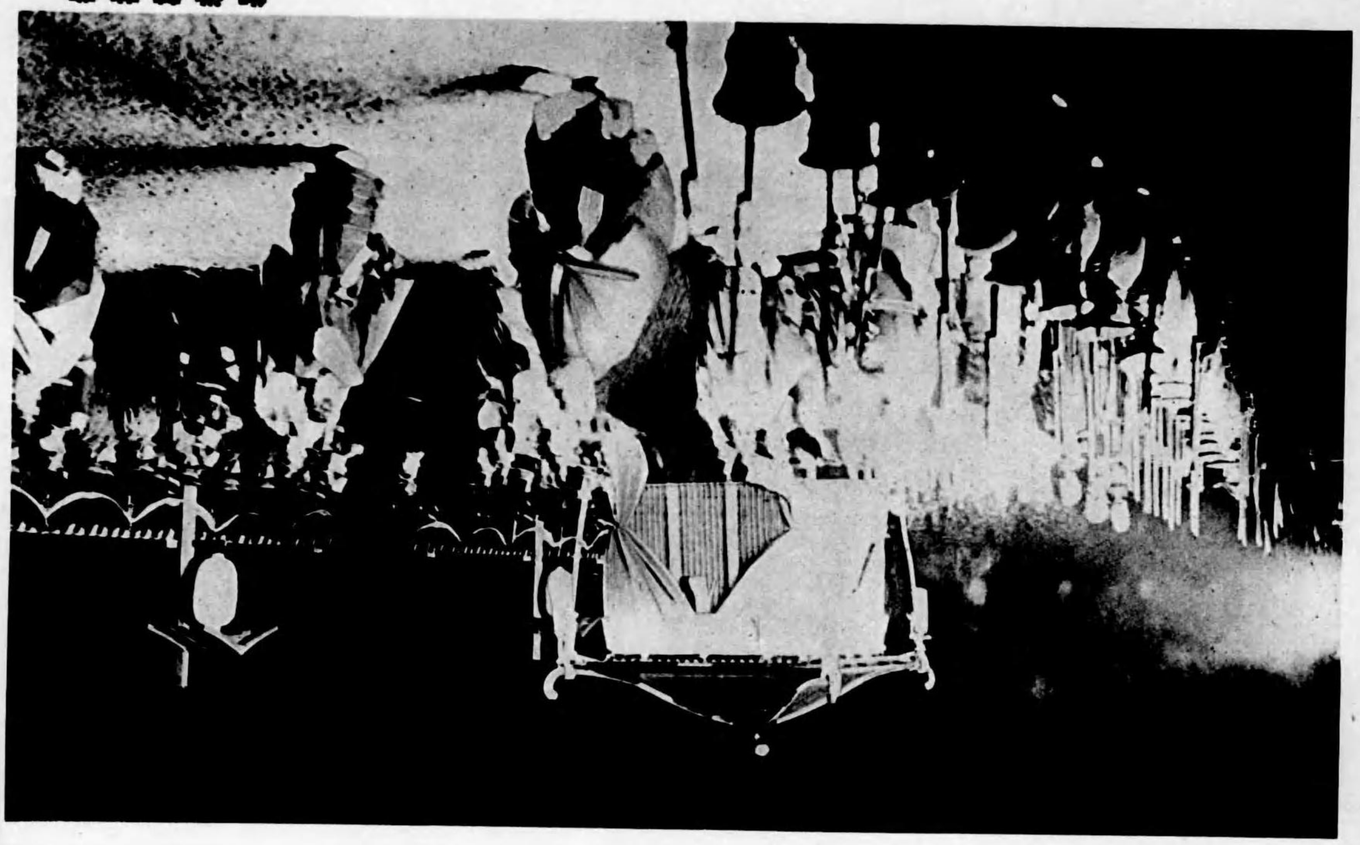
秩父宮には二ューヨーク御到着と同時に出迎の新聞記者に對し左の如きステートメントを與へられた。

今日余は最も悲痛の極みにありて立國に念ぎつゝある。從つて余は此の光榮ある歴史的な旅行に参与し能はざりしことを遺憾とする。余は最も崇敬なる陛下が日本と最も親しく今日の世界的地位に到達するこの國の國民諸君に對し親しく謝意を表するの機會を得せざる事をすこぶる遺憾とする。今日余はかゝる機會なく然るに今日余は此の國を訪れ余は國民なる故に國に念ぎつゝ國を訪れ余は國民に接するの機會あるべしと信ずるが故に國民諸君に對し親しく謝意を表するの機會を待つてゐるべきことを信ずる。

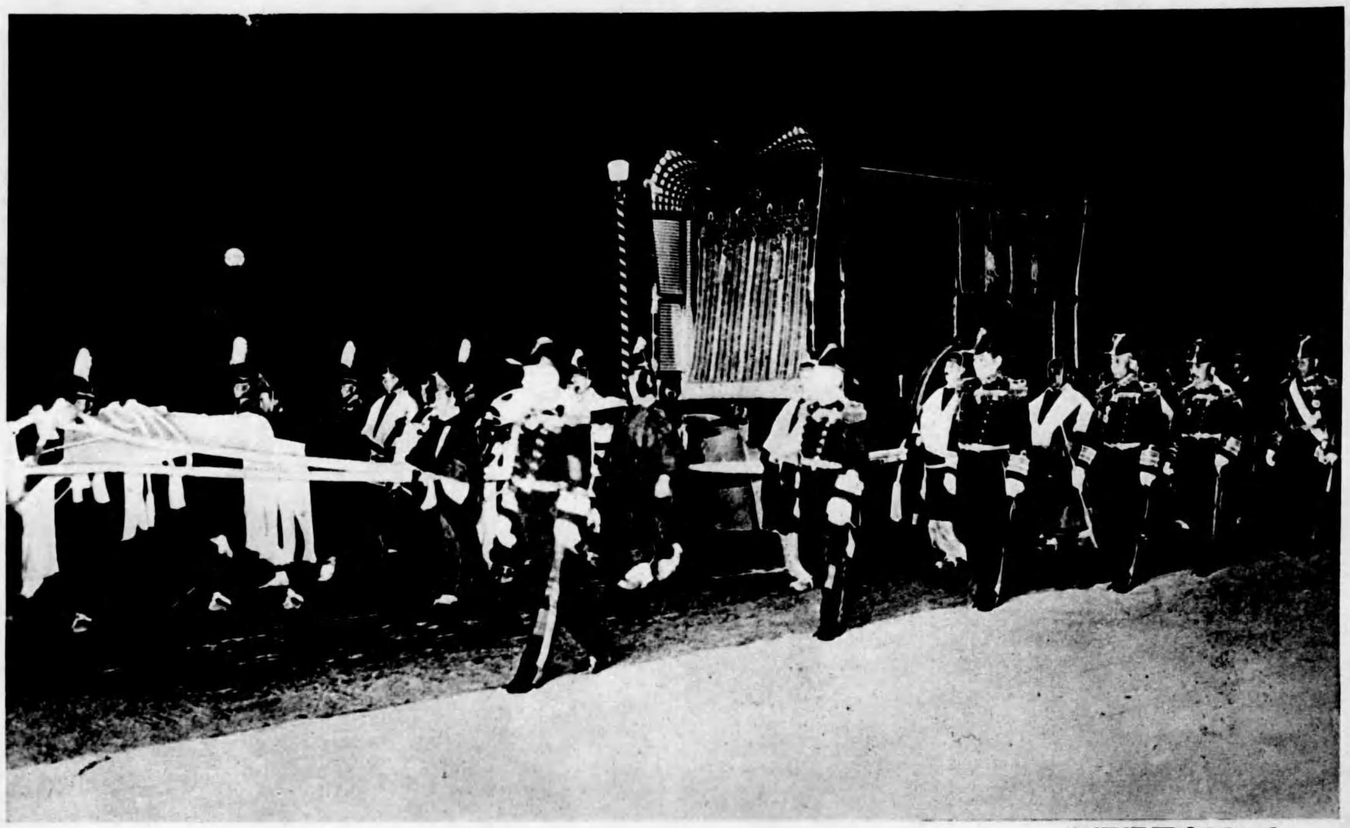
御滯佛八年、大正天皇の崩に遭は
せられ急ぎ御歸朝の東久邇宮殿下

麻布市兵衛町御の殿に御帰の際の盛厚王、王常彰王の玄関おてれらせに伴を立ちのことを拝

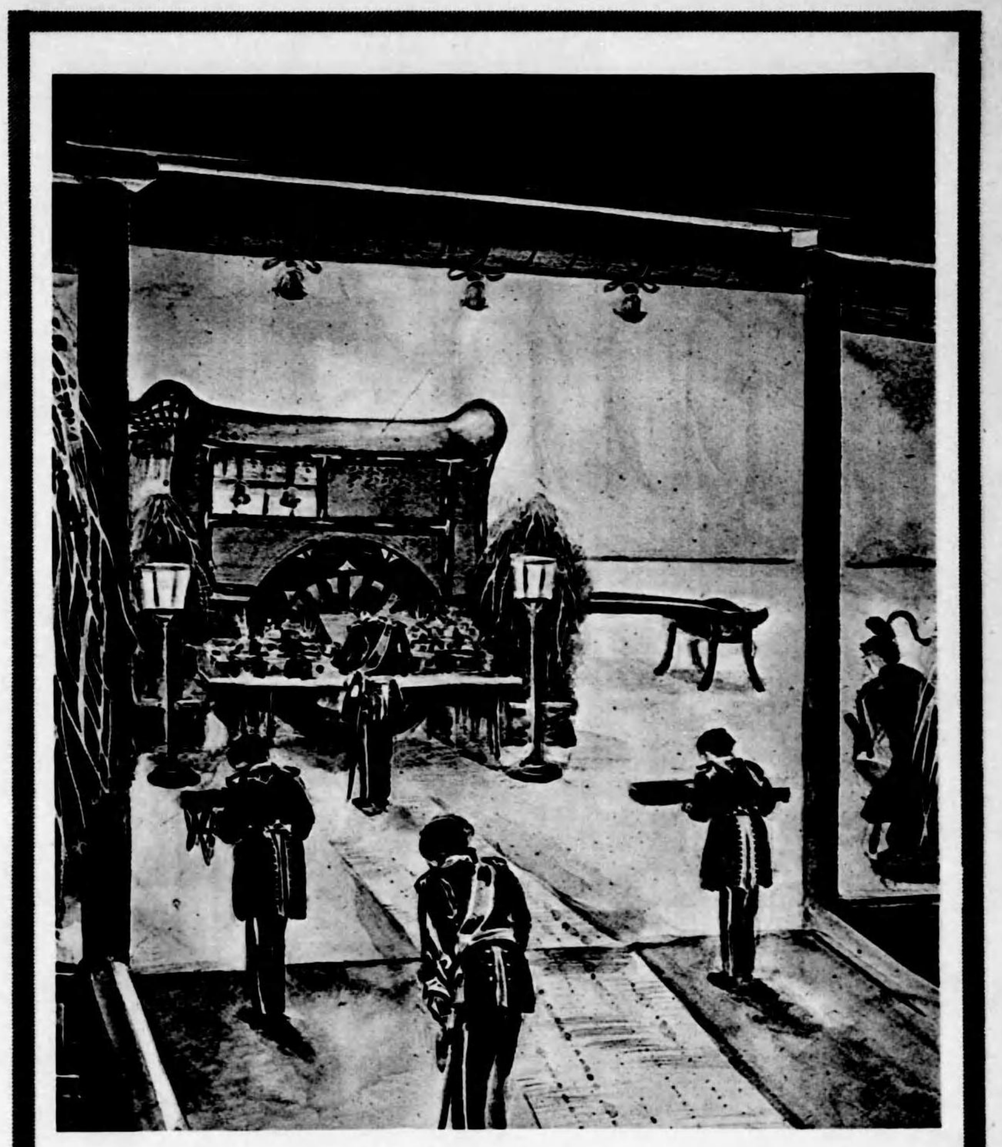
横濱御上陸の光景を傳
れる新聞記事の一節



御聯高乗室
(宮殿エンヒ御聯隊)



大正天皇靈柩御還御
(皇の門附近にて宮殿)



御誄

御名敬ミテ
皇考ノ神靈ニ白ス恭シク
惟ルニ
皇考位ニ在シマスコト十
有五年深仁厚澤人心ヲ感
孚シタマヘリ一朝不豫久
キニ彌リテ痾エタマハス
其ノ大漸ヲ傳フルニ當リ
テハ遠近爭ヒテ神祇ニ禱
リ其ノ大行ヲ聞クニ及ヒ
テハ億兆考妣ヲ喪フカ如
シ嗟予小子正ニ諒闇ニ在
リ梓宮ヲ拜シテ音容ヲ想
ヒ殯宮ニ候シテ涕淚ヲ灑
ク玆ニ大喪ノ儀ヲ行ヒ哭
イテ靈柩ヲ送リマツラン
トス今ニ感シ昔ヲ懷ヒ哀
慕何ソ已マン嗚呼哀イ哉

山陵の御儀

山陵正門にて
御葬列中の
白馬黃輦(中)
柩・鈴・月像輦
月像輦(下)

御陵誌
參陵院の玄宮前にお祓ゐした御陵誌は國陵大安位置玄宮の御帳帷を兼ねばされしもの、玄宮は その石槨である。御陵誌は長さ三尺五寸幅二尺厚さ七寸の花崗石に彫刻されたものである

山陵の儀

八日午前零時二十五分新宿御苑御殿を發した御葬列列車は代々木、新宿、中野との他沿線各駅のホームに整列する人々の拝礼をうけつゝ同一時三十五分東淺川御殿に着ノ。御靈柩は直に列車から靈柩車に奉安され、八瀬童子これをかつぎまゐらせ杉並陵園、伊藤式部長官、一本宮内大臣その他の諸行にて墓所、靈輦につゞいて天皇御名代秩父宮雍仁親王殿下には祭気身にしか山地の深夜を外套も有されず陵雪まだらなる陵道を進ませられる。やがて御靈は祭場殿に御着、御靈柩は靈輦より更に新たなる御輦に移され、インクラインにより斜面百五十尺のレールを水平のまゝ靜かに十五分間にして上る。内陵に於し玄宮内石槨に定まらせ給ふ。長さ七尺、幅一尺三寸、二百四十貫の御影石五枚を嵌めるコンクリートの石ぶたは閉され、御物櫃、御墓碑も石槨の左右に布列され、この作業を全く終了せるは午前五時四十五分であつた。かくて陵所の儀式は始められた。天皇御名代秩父宮には拜礼の後、御含文の奏上あり、一時間にして最後の御儀をすませられ、秩父宮には高松宮閑院宮と御同墓玄宮前に上らせられ、お立會の上杉謹陵頭をして玄宮のあかりの幽扉をしめさせられた。これ永遠のお別れである。各宮にはしばし御歎聞あらせられて、玄宮をお下りになつたのである。時に午前六時山陵の儀も滞りなくすませられたのである。

御大葬雜觀

御霊柩を奉送する人々

大喪儀に參列すべく三十九軍旗の入京（二月六日）

赤坂離宮附近の奉送者

御霊柩を奉送する人々（午前九時から約十時の間）

御霊柩は午後（午前）から約十時の間に

皆あふれてその夜の御行列を待つ）上圖

御霊柩に御奉送の道へんとする人々（午後

右側々と明しの燈れられは御行列）

皇室と縁へんとする山縣伯爵

御用掛（前列）

（皇族官等）

の御遺骸

宮城内廣場御

御軍人の奉送

皇族御葬の奉送

（宮城内廣場）

由緒ある御遺骸の乘輿に むしろと敷いて御棺列と付つ近隣の人々

行印社信通報電本日・内ノ丸京東
電話社信通内丸京東・一第ビヂング

309
121

昭和二年二月十日印刷
昭和二年二月十五日發行

秋田市大町一丁目十四番地
編輯印刷兼發行人　根本八太郎

【定價金六拾錢】

發行所　秋田魁新報社

終